熊本支部報

日本山岳会熊本支部

No. 5　平成6年3月31日
発　行　日本山岳会熊本支部
熊本市二本木3丁目3－8
（田上敏行・気付）
電話（096）324－1200
編　集　本田誠也・河上洋子
印　刷　(有)みうら企画
熊本市清水町山室50-80

目　次

・支部長随想……1
・会員随想……3
・会務報告……17
・会員消息……20
・後　記……20

九 州 脊 梁……山のたより……

支部長 本 田 誠 也

「私の山への憧憬をみたしてくれるものは、はじめから山の奥深さということであった」…今西錦司・山岳省察より…九州で山の深さ、山の大きさをもとめるならば、矢張り九州脊梁山地ということになるだろう。私が山の奥深さを求めて、初めて脊梁山地に分けいったのは1952年のことだから、もう40年をこえている。このところ熊本では九州脊梁ブームである。その頂点は平成3年頃で、熊本日日新聞社ではこの年に九州脊梁を年間企画として取り上げ、7部54回にわたり連載した。それは九州脊梁の山と自然、動植物、山村民俗、山林開発と生活現況などを紹介するものであった。熊本と宮崎の県境線を形成し、その両脇にかって秘境といわれた五家荘、椎葉荘、米良荘を抱える脊梁山地周辺も開発の波に乗って大きく変容した。今は故人になられて久しい佐賀の成富正義先生(元・肥前山岳会会長 佐賀県山岳連盟会長)は、昭和30年代から40年代にかけて精力的に九州の奥深い山域の現況を調べ、次々に山岳誌「岳人」に発表された。昭和40年3月「九州脊梁の山」の仕上げのため、一旬にわたり脊梁の盟主、国見岳(おおぐるみ)を中心に白鳥山、扇山などに登られた。事前に現地の状況について照会があったのでお知らせしておいたが、早速丁寧な山の便りが返ってきた。当時若輩の私に、高齢の先生から礼を尽くしたお便りを頂き恐縮した思い出がある。古い地図類を整理していたら、そのお便りが出て来てひどく懐かしかった。行間に、謙虚で温和な、しかし一徹なところもある先生のお人柄が滲んでいて楽しいお便りであった。内大臣川のトロ道が車道に変わり、バスが二本杉迄入り、椎矢峠の林道工事が進められている頃のことで、脊梁山地の環境も大きく変わりつつあった。

成富先生からのお便り

謹啓　桜も咲き初め陽春の砌いよいよご健勝の御事と慶賀申し上げます。さて私は去る3月21日(1965年)貴方のご教示の通り、単独で熊本～砥用経由山瀬までバス、内大臣橋の

少し先の方で浜町から来たバスに15分ばかり乗り、角上から歩いて内大臣事業所に着き、佐賀営林署の紹介で宿泊。翌22日、国見岳往復、23日再度国見岳に登り尾手ノ尾に下り、日当に行きかねて知り合っている家に泊まり、白鳥山、扇山などに登り、27日、日当～五勇山～国見岳～広河原谷～内大臣事業所に帰り、28日早朝、角上から浜町～熊本までバス、その日の午後5時佐賀着、29日、家に帰りました。広河原谷の造林小屋は昨年夏の大水で流失し、現在は少し上方に新築され、2、3日前完工、大きく立派な建物でした。車道は小屋の前から左岸に大きく曲がり、小屋の上手に延び広河原谷に入り込み、更に高岳、三方山方面の尾根の内大臣川側に延び、今盛んに工事中で、宮崎県側の工事中の車道と11月頃には接続する(現在の椎矢峠)とのこと、トンネルの計画は変更して稜線を越すそうです。広河原小屋から山路に入り尾根を越して森林帯に入り、右側から下りてきた小谷の二つ目頃からザラメの雪となり、国見岳までほとんど土を踏みませんでした。浅いところでは30cm位、深いところで1m位と思いました。国見岳まで人の踏跡が全然ありませんでしたが、天気がよく雪はしまっていて踏み込むことも少なく、要所には赤のビニールテープを結びつけて迷いもせずに登れました。獣の足跡も全く見えませんでしたが、事業所でも、尾手ノ尾や日当でもそのことをよく尋ねられましたが、足跡がないのは38年冬の豪雪で猪やカモシカが死んだからだろうということで、椎葉の猟師たちも今年は猪などほとんどとれなかったとのことです。五家荘の樅木などでは38年の1月、2月には猪やカモシカなど60頭ほど雪のなかで弱っているのを捕ったということでした。国見岳の頂上の変化、荒れ方には全く腹がたちました。昭和30年4月末、私が始めて霧立越をこえて滝から日当に着くとすぐ未知の人が訪ねて来ました。その人は水戸の人とかで、水無の岩屋にもしばらくこもっていた由、国見岳は天孫降臨の山で、椎葉の人が病気にかかり、働いても豊かにならないのはその聖山をおろそかにするからだといっていました。私は私が学んだ、また、勉強した地学、日本人の起こりなどから、天孫降臨など全くの伝説、架空の妄信だといいましたら、大変な不機嫌で帰りました。37年にその人が小さい祠をたて、また昨年夏やや大きい木造の祠をたて、最近2万円を送って来てこれで鳥居をたててくれと水戸からの連絡であったと日当の人はいい、そしてその人は新興宗教の一人だとも言っていました。木の祠の中には小さい板に「天孫日之宮39年改築 小島末喜・建 昭和37年11月11日」と書いてありました。私は頂上の小祠、木の香も新しい祠などを見てほんとうに嫌な感じでした。火をつけて焼き払いたい心をやっとこらえました。小国見の東側のまき道は雪が深く人の往復した跡、深く踏み込んだ跡もありました。白鳥山の辺りは伐採されて杉が植えてあり、雪も深く稜線だけがとけて三角点は頭を少し出していました。扇山は水場から楽に行け以前のような藪こぎの拷問がないかわりに、頂上は荒れて缶、ビン、ビニールやポリエチレンのチューブなどで不潔でした。尾手ノ尾から登った路と石堂屋の中間で熊本商大とかいっていましたが二人の登山者にあっただけ山は静かでした。お手紙にありました内大臣事業所の中島、椎葉氏には会う時間もなく、尾手ノ尾の甲斐岩雄氏はおりから降りだした雨のため訪ねることができませんでした。今度の登山が雪の山であり、広河原から国見岳までは初めての路でしたが右の通り、滞りなく登れましたことは全く貴台のご懇切なご教示の賜物と存じ有難く御礼申し上げますとともに、右登山の大要、私の所感をお知らせ致します。

敬具

4月5日　　成富正義

屋久島・宮之浦岳に登る

副支部長　和仁古　昇

昨年わが国は長く続く経済不況の内に年の暮れを閉じた。そんな状況の中でも、今の私にとって唯一の心の安らぎを与えてくれる、山行を続けることができたのは幸せなことであった。数えてみると、昨年の山行回数は大小取り混ぜて72山だったから、５日に１回は山に登った勘定になる。その中でもっとも強く印象に残っているのは、何といっても暮れ近くの11月末に、屋久島の最高峰宮之浦岳に登ったことである。これまでにも屋久島には何度か行っているが、天候に恵まれず最高峰の宮之浦岳に登ることができなかった。

喜寿の年を越え、体力的にもこれが最後の機会であろうと考え、十分に計画を練ってトライしたが運よく登頂に成功して、こんな嬉しいことはない。以下はその時の登山記録である。

＝登山期間　1993年11月20日～23日　４日間＝

◆11月20日(土)曇り時々晴れ

熊本駅2:00(ＪＲドリームつばめ) 6:05 西鹿児島駅駅構内で朝食をとりタクシーで鹿児島港へ

鹿児島港発8:45(折田汽船フェリー) 12:30 宮之浦港着．フェリーの中で、偶然にも福岡支部の吉村支部長にお会いして歓談する。

宮之浦港発12:50(バス) 13:50尾之間着

民宿「たからべ」に宿泊する。

◆11月21日(日)曇り時々雨、風あり

天候不良のため、トレーニングを兼ねて蛇之口ハイキングコースを歩く。

民宿発9:05～尾之間温泉横登山口9:30～耳岳歩道入口10:10 シダが茂る亜熱帯性密林のなかを行く。鈴川は上流部も幅が広く増水していて徒渉困難のため、ここで引き返すことにして昼食をとる。鈴川右俣徒渉点付近13:00～登山口14:30 蛇之口滝の近くまで行ったことになるが、途中は亜熱帯性植物が繁茂していて、植物に関心がある私にはたいへん面白かった。特に珍しかったものとして、カンツワブキ、アオノクマタケランなど、外に名前が解らないシダ類やヘゴなど多数を見る。尾之間の登山口まで下りて来たら、前日このコースから尾之間歩道に入り、乃木尾根を経て淀川小屋に向かった７名のグループがまだ帰らないと、その仲間だという人に消息を尋ねられた。無事であればよいが、心配なことだ。

◆11月22日(月)晴れ

明け方、満天の星を見て快哉を叫ぶ。

尾之間4:20(タクシー)5:30淀川入口5:40～6:40淀川小屋7:05～小花之江河8:35～花之江河8:50～黒味分かれ9:25～投石平10:00～遭難碑10:50～12:10宮之浦岳・三角点(強風あり寒気厳しい)12:25～13:05翁岳分かれ(昼食)13:35～投石岩屋14:30～黒味分かれ15:10～花之江河15:40～淀川小屋17:05～淀川登山口18:00　予定より遅れたが待たせていたタクシーに乗り帰路につく。

朝から天気は良かったが、花之江河を過ぎる頃からガスがかかり、登るにつれ風も強くなり寒くなってきた。周囲を見ると一面の樹氷群が、まるで花が咲いたようで見事である。

時折り強風でガスが切れると、周りの山々がポッカリと姿を現す。皆慌ててカメラを構えるが、すぐ激しく流れるガスに隠されてしまい、なかなかうまく撮れないようだ。毎日新聞社のツアー45人を筆頭に、今日の晴れ間を見込んで多くの登山者が一斉に繰り出したため、細い登山道は交通渋滞でなかなか前へ進めない。従って宮之浦岳の山頂に着いたのは予定より可なり遅かった。だが永年憧れた頂上に立つことができて、我々４人の感激は大きかった。固く手を取り合って成功を祝した。

◆11月23日(火)晴れ

尾之間11:10(バス)12:30宮之浦港13:20(折田汽船フェリー)17:10鹿児島港(タクシー)17:30　西鹿児島駅18:57(ＪＲつばめ26号)21:35熊本駅

《あとがき》

11月22日　宮之浦岳登頂の日に歩いた距離は、万歩計で計って約19.7km。

今回は尾之間の民宿を基点に登山をしたが尾之間は屋久島の中でも、もっとも気候が温暖な所で、背後に本富岳(モッチョム)の巨大な岩壁が迫り、民家の軒先にはハイビスカスやブーゲンビリアの花が咲き乱れ、前面に広がる海の眺めなど風景の美しい本当に良いところです。なお近くは屋久島温泉(国民宿舎)、尾之間温泉、熱帯植物園などもあり、また尾之間歩道ハイキングコースや本富岳登山の起点でもあります。

《所要経費》

・交通費	20,350円
熊本～鹿児島往復ＪＲ運賃　8,500円	
折田汽船フェリー往復運賃　6,000円	
尾之間～淀川入口、タクシー往復運賃 5,850円(1人当たり)	
・宿泊料 尾之間民宿たからべ(3泊4日分)	20,000円
・雑　費	約4,500円
合　計	45,000円

サンティアゴ詣で

馬　場　　猛

風樹の嘆をかこって、遥々とスペイン北西部のガリーシアへ、サンティアゴ詣でに出かけました。エルサレム、ローマのヴァチカンと並んで三大聖地と呼ばれる巡礼の地で、正式にはサンティアゴ・デ・コンポステーラといいます。屋久島じゃないけれど、月に35日降るという雨で有名な街です。案の定、連日の雨。しっかりと、その準備と覚悟はして出かけたのですが、10月上旬というのに氷のような冷たい雨に震え上がり、コーヒー１杯50～100円位のバルに駆け込んでは暖をとりました。舐められるといけないので、コーヒー１杯300円余りのデラックスな店に入ったことも付け加えておきます。

カテドラル（大聖堂）の中にある「栄光の門」は、イベリア・ロマネスク最高の傑作といわれるのですが、おちおち眺めるわけにはいきません。聖ヤコブ像の柱に手をかけてお祈りする巡礼の列で一杯。その尻尾について行列の順に仰ぎ見る訳です。永年にわたる巡礼の手によって、大理石の柱には五本の指窪みがついていて、その手形に右手指を差し込んでお祈りするのです。大型の香炉を６人の若者が懸命に振り回す壮観な行事は、特別なお祭りの時しか行われないので、とても無理だと諦めていたのですが、今年(1993年)は10年に一度の巡礼の年だったので幸運にも参観できました。全身に香を浴びて身を浄め、先考・先妣と、敬虔なクリスチャンだった三谷孝一支部長ご夫婦のご冥福をお祈りしました。

甫与志岳に登る

石　井　久　夫

1993年11月、友人に誘われて甫与志岳に登った。この山は大隅半島南部の山々（肝属山系)の最高峰(968m)で、大隅山の会の資料によると、「一帯は常緑広葉樹が山頂まで密に茂る暖帯林特有の景観を持つ山である。山麓は杉の造林地が多く、登山道の両側と頂上付近に僅かに原生林が残されており、シイやタブ、カシなどの大木が繁茂して南の山だなあという感じである」とある。丁度、鹿児島に被害を与えた台風通過の後で、大小無数の樹木が根元から、或いは途中から薙ぎ倒されて山道に覆い被さり、たいへん登りにくい山行であった。高山町から内之浦に抜ける国道を、途中で姫門林道へ左折して峠を越えると、内之浦に続く大谷添林道となり、その途中に甫与志岳登山道の標識があった。普通なら40分位で登れるコースだが、倒木の通せんぼで道が分からなくなり、２時間近くもかかってしまった。頂上は非常に視界が広く、遥かに種子島や屋久島まで望見でき360度のパノラマであった。見渡す限りの山の斜面で、南面だけが茶色に彩られていたので目をこらして見ると、台風による潮害のようであった。その殆どがスギで潮害に弱いことが実感できた。

完全に枯れる前だったので、黄葉と見間違えるような景観である。帰路は一応ルートも

わかったので40分で登山口に着いた。途中で花崗岩の露出している場所に、タカクマホトトギスを見付け皆大喜びだった。春先ならばアケボノツツジ(南限)や、ヒロハドウダンツツジの花などが見られるということで、また一度訪ねたいと思っている。

〈付 記〉

山頂直下の岩屋には豊玉姫、彦火火出見尊、玉依姫を祭る小祠がある。伝説によると、玉依姫が鵜草鵜不合尊を養育されたので、母養子となり以後、少なくとも昭和10年代頃まではそう呼ばれていたようである。

錦秋の奥秩父

—全国支部集会に参加して—

門脇愛子

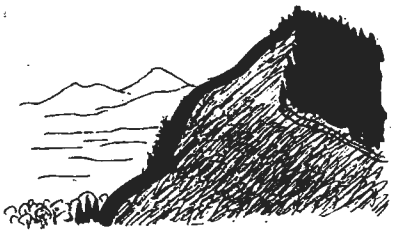
昨年の全国支部集会は、今まで足を踏み入れたことがない奥秩父の山ということで、はやくから楽しみにしていました。日本山岳会の各支部が毎年回り持ちで開催する、この支部大会には、1987年の京都大会が初参加でした。このときは、全山紅葉に飾られた比良山を歩きましたが、琵琶湖畔の前夜祭（野外パーティ）では、近江牛の丸焼きが出るなど楽しい思い出です。1989年は山陰の伯耆大山。皆生温泉の前夜祭では、名物の松葉ガニ食べ放題。期待していた大山(弥山)山頂はガスのため眺望ゼロでしたが、元谷から眺めた北壁を彩る紅葉は、比良山のそれとはまた違った美しさでした。翌1990年、山形の蔵王大会は、東京で所用を済ませたところで足を痛め、参加を断念しました。その後の２年間は何かと支障があり、参加することが出来ませんでした。それだけに期待が大きかったのですが、今まで同行していた友人が、皆都合が悪くなり一寸残念でした。大会の会場は山梨県須玉町増富温泉郷。そして日本百名山にも選ばれている瑞牆山に登るのです。ＪＲ中央本線の韮崎駅で下車すると、お揃いの黄色いユニホームの地元役員の方々に迎えられました。次の電車で降りた人々と共に、バスで増富温泉郷に行きましたが、先行されていた本田支部長や鶴田さんにお会いしてほっとしました。

前夜祭の行事の模様は、ＪＡＣの会報に詳しく報告されているので省略しますが、夫々の土地の特色があり十分に楽しめました。

翌日の瑞牆山登山については、その時の日記より転載してみます。

＊10月24日(日) 快晴

増富温泉不老閣を５時45分マイクロバスで出発。前夜、体調を崩された鶴田さんは、木賊峠周遊の散策コースへ廻られた。瑞牆山荘前の登山口で下車すると、５班に分かれて登山班編成。夫々２、３人の山梨支部や岳連の方がサポートにつかれるという、万全の態勢に感謝する。私たちは第５班で、班長は山本さん。熊本２名、岩手２名、富山３名というメンバー構成である。森林帯を落葉を踏み締めながら歩く。結構、急登の箇所もある。富士見平から尾根を巻いて、一旦、天鳥川の谷に下り、それから奇岩を縫って息もつかせぬような急登が始まる。ナナカマド等の紅葉が美しい。その紅葉のシーズンとあって、細い道は登山者の列で交通渋滞。満員の山頂を避けて、大ヤスリ岩側に廻り時間調整する。頂上は岩、岩、岩そして360度の大展望。富士山、南アルプス、八ヶ岳等がぐるりと展開する。下山予定の午後１時より皆早く下りて、木暮理太郎翁の碑前祭に参加する。金山平の有井館前の広場では、山梨支部心尽くしの甲州名物「ほうとう汁」や甲州葡萄、ワインなどが振る舞われる。明日、金峰山に登る予定の本田さんと別れて、一人甲府へ戻る。錦秋の山々を最高の天候のもとで満喫した一日であった。



山のうた(2)

河上洋子

「いつになっても浮世の義理から解放されないので」と、これは単なる無精から山行を怠る口実にしている私を、K先生は時々叱咤激励して山に誘って下さる。おかげで昨年も九重の雪や、早春のブナ林、そして山の花々にチラリとでも会うことが出来た。まことに有難いことである。ただ口惜しいのは訓練不足(決して年齢ではない?)のせいで足が痙攣を起こしたりして、このところ信じられない位のビスタリズムであること。しかし、その分まわりの景色がよく見えるようになったし、写真もゆっくり撮れるし、歌の材料も拾えると思うことにしている。歌といえば、今年は第2歌集をまとめたいので、その整理に取りかかったが、なまけていた割には、山の歌もいくつかあり、作品を手に、その頃の山行や山仲間を懐かしんでいる。忘れられない山の筆頭は矢張り久住山、久住別れの小屋の前から見上げる主峰は、特にこの頃の私にとって、天に聳える十字架のようにも思えて心に迫る。親しい人々を沢山失ったからかもしれない。

◇家籠るわれを誘いてやまざりし久住雪山天の十字架
◇雪山に誰が鳴らしいる鐘の音か逝きたる人ら蒼々と顕つ
◇山靴に踏めばきしきし締る雪もはや失うものなく無心
◇山頂を越えてなだるる風の音けものの耳とわれはなりいて

昨年は2月に、清水峠から駒返峠まで早春の南外輪を歩いた。峠をつなぐこのコースは私の山歩きの最初であったし、心のびやかな尾根みちとして懐かしい。

◇雪解けみち山のけもののとびとびて行きしか泪のごとき足あと
◇早春の雑木の山の雪みちを光となりて犬下り来る

一昨年5月には、これも好きな山、天主山に山芍薬の花に会いに行った。恋人に会うように心弾ませて。

◇椎矢峠オオカメノキの白き花散り溜りいてそこより左折
◇藪漕ぎに倦みて無口となれるとき幻華古木を灯して白く
◇恋人に会えると男つぶやきて山芍薬を腹這い撮す

5月の森は水を噴くようなみずみずしさで樹々も白い花が多く、風は緑の匂いを吹きこぼして賑やか。まるで神が遊ぶのではないかと思う。

◇うすあおく芽吹く阿蘇やま響動(とよ)もして辛夷の花に神遊ぶとき
◇春浅きブナの林をつき抜けて山桜白く神を宿らす

8月、若い人々のキャンプにつきあう。舞台は北外輪の牧。北海道からドサンコの馬を連れてきて、野生の形に放牧している谷間である。小さな仔馬も生まれていた。

◇山の水存分に飲めば人間の血の色いまは馬に近かかり
◇夕すげの淡く黄に咲く高原を踏みゆく誰も影失えり

◇環境論ビール片手に言いいしが阿蘇の大野の闇に吸われき

むかし、Oさんは私の唯一の山友であった。彼女はどこの山も直線に登るのが好きで廻り専門の私としばしばもめたものだ。いつか阿蘇の外輪歩きをしたとき、くねくねと廻る草原の径に我慢ならず、真直ぐに草原を突っ切って歩いた。しかし草原は意外に深い谷を幾条も刻んでいて、Oさんは崖っぷちで立往生をしたことがあった。そして彼女は根子岳の岩場から一直線に堕ちて還らず、昨年11月は丁度20年であった。久しぶりに当時の友人達が根子岳のヤカタガウドに集まったが、その谷の荒れ様は痛ましく、しみじみと20年の歳月を感じた。

◇遭難死したる山友　菊の忌を重ねいよいよ山高くなる
◇山行も間遠くなれば友の死はわが日常に溶けて秋澄む

九州の山はやはり親しく、山容も自分に引きよせて歌うことが出来る様に思うが、一昨年のカナディアンロッキーは、大きすぎて未だに私の中に納まりきれない。昔歩いたネパール・ヒマラヤはそれなりに人間くさくて、山麓の人々と触れ合えたけれど。ロッキーはあまりに美しすぎたのかもしれない。

◇日本の山の翳りを持たぬゆえこの山の夜々ひたにねぶたし
◇鳴き兎かん高く鳴くに目覚めたりはるばるとわれはカナダの山に
◇ロッキーの山旅五日静かなる会話に馴れて花野をたどる
◇断崖より噴きて氷河は滝となる単純にして憚らず落つ

皆さんのお陰の山

鶴　田　佐知子

早いもので一年(1993年)が過ぎた。この一年の私の山暦を記してみたい。まず1月には、待望の高隅山系の縦走を果たした。2月は久しぶりに五木の仰烏帽子山へ。勿論、元井谷の福寿草に会いに行ったのだが、谷の余りの変貌に驚いた。そして3月14日、私にとっては一番大切な相棒を失った。男としては線が細く、生き方もあまり上手でない彼だったが、私には最愛の宝だった。毎日の生活は少しも変わらないのに、いつも横にいる筈なのに何処をさがしてもいない・・・そのショックから立ち上がれたのは山であり、山の仲間であったような気がする。生活のリズムが戻ると、成る可く山に出かけた。暇を見付けては手近な金峰山へ。そこには何時も顔見知りの「昔の若人」女性の面々がいた。ホッとして気分の転換が出来て元気が出る。5月には、えびの高原のノカイドウに初めて会うことが出来た。キリシマミズキも花盛りで、30年ぶりに大浪池への道も歩いた。秋、再び霧島を訪れて、えびの高原の池巡りの遊歩道を歩き白鳥山に登った。駐車場から余り遠くない川湯で、まさに天然の露天風呂を楽しんだ。

これも皆、山と山の魅力にとりつかれて集う仲間たちのお陰である。天候不順で登れない山もあった。九重の三俣山はすがもり小屋まで。傾山を変更して丹助岳。天草の次郎丸岳、古祖母山、芦北の大関山など主にアルコウ会の例会山行だった。シェルパ阿南さんのツアーで行った福岡の馬見山、屏山、古処山の縦走はきつかったなぁ！　熊本支部の秋の例会(九州四支部合同会議)は、前夜の民宿での懇親会も楽しく(食事もアルコールもよかった)馬場さんのハンググライダーのフライトも見ることが出来て楽しい一日だった。その後、10月23日、24日は全国支部大会で山梨まで出か

けた。前夜の寒さと貧血で体調を崩し、瑞牆山に登れなかったのは残念。50年程前２年近く住んだことがある私にとって、山梨は懐かしい。散策組の人たちと1,755mの2等三角点(三角点名・増富村)へ登り、木賊峠からは眼前に展開する山岳景観、間近な瑞牆山、金峰山その奥に浅間山、そして八ヶ岳、南アルプスの山々、富士山までの眺めを堪能した。これらの山々にいつの日か登ることを心に約した。

山仲間の皆さん有り難う。

日記帳から

樋口　格

1月23日(日) 曇時々雪 気温6°C

馬場　猛さんに誘われて、大牟田市内の三池山麓にある天台の古刹、普光寺へ厄よけ祈願の護摩焚き参りに行く。家内と共に草木の馬場さん宅を訪れたが、奥さんは左脚の怪我で行かれないので、馬場さんと私たち夫婦の３人で出発する。三池を経て今山の普光寺まで約４kmの道を50分かけて歩く。参詣客でごったがえす中で一先ずお参りを済ませ、雪の舞う山道を三池山へ登る。昨夜来の雨雪で泥濘となって歩きずらい急坂を、30分で中腹の御堂まで登って一休みする。火渡り行事を見るために折り返し下る。既に行事は始まっていたが、祈願料をお供えして庫裏でお斎を頂く。境内での行事は最高潮に達し、修験者や寺僧達の手によって護摩が焚かれ、燃え盛るなか修験者達が火渡りを行う。次いで火の収まりを見て、一般の参詣者達が真剣な表情で火渡りに挑戦する。初めて目にする行事であった。終わりに近づくころ帰路についた。途中の無人販売所で、漬物や果物などをリュック一杯買い込み、馬場さん宅に14時に着いた。屋内の改装が済み、ステレオ５台が設置された各部屋を案内して貰い、説明を聞いて暫く休憩し15時帰宅した。楽しい一日であった。

第32回全日本登山体育大会に参加して

神谷平吉

昨年の一年間、48回の山行を数えたが、折悪しく夏の休みには好天に恵まれず、遂に一歩も九州から外へ出ることは無かった。とはいえ数々の楽しい山の思い出を作るには事欠かなかった。わけても晩秋の11月13～14日にかけて、五家荘の樅木を拠点にして、九州脊梁山地の国見岳、五勇山、烏帽子岳、白鳥山を舞台に繰り広げられた全日本登山体育大会に参加できたことは忘れられない。私はスポードクターとして、また家内はナースの立場で夫婦共々参加させていただき、貴重な体験を重ねることができた。たしか昨年の夏の頃であったと思うが、県岳連の谷川理事長が、わざわざ来訪されてご依頼を受けたのだが、その時は詳しい内容は伺わないままに、全国規模の大きな行事とも知らずにお受けしたのだった。以下、その当時の行動記録を簡単に、お知らせする。

11月13日(土)　その日の診療を終えて、午後２時前より砥用町から二本杉を経由して、五家荘の樅木に向かう。途中土砂降りの雨に会い折から紅葉見物の帰り客の車列に出会って、遅々として進まずやきもきした。集合地、樅木の泉第八小学校に到着したのは、黄昏迫る午後５時半を過ぎていた。本部で受付を済ませる間もなく、「２人が負傷した」との連絡が入る。何のことかと訝ったが、雨のために濡れた学校の階段で滑り、一人は腰を強打し一人は下肢に擦過傷を負ったとのこと。早速救急病院の店開きである。この大会の参加者数は、地元の役員も含めて300名と伺ったが当支部の工藤先生や松本先生も役員として大活躍していられる。参加者の大部分の方々はこの体育館に寝袋持参で宿泊されるとのことであったが、私たちは特別に民宿の「しゃくなげ荘」に部屋をとっていただき同宿の方々と

歓談する機会に恵まれた。午後9時から開かれる大会役員のミーティングに出席するため、灯り一つない夜道を歩くと、雨上がりの空に星のきらめきが美しい。このミーティングで最終的に細かなチェックがなされ、救護に関する打合せも行われた。参加者は全国各地から、年齢構成も20代から最高は何と82歳まで山歴豊かな方々の集まりである。登山行動はA、B、Cの3隊に分けて行われる。

即ち、Aコース(樅木～国見岳～五勇山～烏帽子岳～樅木)Bコース(樅木より烏帽子岳往復)Cコース(樅木より白鳥山往復)となっており、私たちは先ずB隊に同行し、烏帽子岳山頂でA隊と合流するよう要請された。

11月14日(日) 早朝、雨はすっかりあがっているが山は雲に閉ざされて見えない。B隊は午前6時過ぎに出発、樅木谷沿いの林道を歩く。

私たちは林道終点の烏帽子谷入口まで4WDの車で送っていただいてB隊の到着を待つ。

ここから一旦、清流岩間を縫う烏帽子谷へ下って小休止。そのあとスズタケが密生する急斜面に取りつく頃から、まとわりついていた雲はすっかり吹き払われ、燦々たる陽光が木の間を洩れ心地よい汗を流しての登高となる。やがて視界が開けて明るい石灰岩の尾根に出るが、ここから三角点がある烏帽子本峰まで、広がった尾根筋一帯は豊饒なツクシシャクナゲの樹海が続く。春の開花期の壮麗さに想いを走らせたが、程なく標高1,692mの烏帽子岳山頂に到着した。ややあってB隊全員が揃って登頂したが、数人の方に軽い外傷や筋痙攣があった程度で、先ずは一安心であった。

元気に下山するB隊を見送った後、長駆国見岳から縦走してくるA隊を待つ。

A隊は140名近い大部隊なので、更に3班に分けられ各班毎に順次到着したが、皆元気溌剌としているのを見て、安堵の胸をなでおろした。両隊の無事を確認して、私たちの任務の大半は終了した思いであった。帰路は緩やかな脊梁主稜線を南下し、西へ折れてスッケンコ坂を駈け下る。午後2時30分、林道終点に到着し再び4WD車に同乗させて頂き、3時過ぎには無事に大会本部に帰着することができた。この大会に参加させて頂いて、役員各位の並々ならぬご努力と、一年をかけての周到なご準備とに改めて敬服させられた。

しばしば役員研修会を開き、また担当毎に頻繁にコースの試登やアプローチとなる林道の試走などを繰り返されたという。どのコースも丹念に整備されていたが、なかでも烏帽子岳からスッケンコ坂にかけての県境主稜線は、密生したスズタケを見事に切り分けるなど、労を惜しまない努力の積み重ねが、幸いお天気にも恵まれたものの300名という大人数を、スケジュール通りに登頂させるという立派な成果を生んだものと思う。私にとっても色々と教えられる事の多い大会であったが、年末近くになって思いがけない報告書が届けられ、再び当時の楽しかった思い出を甦らすことができた。

平成5年回想の山

神谷文子

熊本支部会員の皆様方は、毎年素晴らしい山行を積み重ねていられるのに、主人と私とはいつも劣等生で申し訳ない位です。それでも、山が好きだという点では何方にも負けないつもりです。山を通じて支部の皆様方と親しくお付き合いをさせていただくのが、私にとって何よりの喜びです。昨年も九州の山々を48回訪ねることができました。

先ず正月元旦には次女夫婦と一緒に薩南の開聞岳に登り、新しい年の初めを祝うことが出来ました。春の九重山行は、沢水から鍋割坂、佐渡くぼ、鉾立峠を経て東面から白口岳に登り、また赤川谷から久住山や、黒岩山、泉水山などの山々でハルリンドウ、キスミレ、シャクナゲ、ミヤマキリシマ、ドウダンツツジなど春の花を愛でる機会に恵まれました。

多雨・冷夏の7、8月は、やっと阿蘇南外

輪の山々や県北の八方ヶ岳に登った位です。折角のお盆休みも霧島温泉に宿をとったものの、連日の雨に傘をさしてお池巡りが関の山でした。それでも少しくらいの雨なら、近くの金峰連山の二の岳、三の岳へ傘を手にして出掛けたものです。この山にはどんなに雨が降っても、樹下に傘を懸けると何とか昼飯がとれる一坪ほどの別荘地？を二ヶ所も持っているのですよ。秋にはまた何度か好きな九重の山を訪れました。9月末の九州四支部合同会議では翌日の阿蘇高岳登山の際、山頂から馬場博行会員がパラグライダーで滑空する快挙も拝見できて、ほんとに楽しい山行でした。10月の連休には、夏に登れなかった霧島へ再び出掛けて、秋晴れの韓国岳、獅子戸岳に登ったり、白鳥山周辺のお池巡りをしたりして楽しむことができました。10月末には登ろう会(熊本市医師会)の山行に参加して、阿蘇南外輪山の地蔵峠から冠岳、俵山を経て俵山峠まで約36,000歩を歩いて深まり行く阿蘇路の秋を満喫しました。途中、護王峠付近で僅かにセンブリを見付けましたが、ほんとに少なくなったものです。

11月、五家荘山地で開催された全日本登山体育大会には、救護班にナースの立場で同行することができました。全国から集まった登山者の方々と、晩秋の五家荘の奥深い烏帽子岳に初めて登ることができました。

この大会の計画、準備、運営をされた県岳連の役員の方々のご努力には頭が下がる思いでした。当支部の工藤先生、松本先生も役員として大活躍で心強いかぎりでした。

平成5年最後の山は年末の26日、折からの快晴に恵まれて県北の八方ヶ岳に山の神登山口から登り、この1年の山行の登り納めとしました。振り返ってみますと、この1年間も何とか健康にも恵まれて、私なりに充実した山行を楽しむことができたと思います。

新しい年もまた先輩の皆様方のご指導を仰ぎながら、楽しい夢のある山行を続けたいものと願っています。

ブルーポピーへの想い

—太姑娘山に登る—

加　藤　稜　子

私がブルーポピーの存在を初めて知ったのは、数年前のテレビの映像。次はシヴァ峰登山報告書の中の写真で。次は花博。その度に私のブルーポピーへの想いは増すばかり。そして本田支部長の「中国にはブルーポピーが踏んだくるごつあったよ」との言に想いは頂点に達した。そんな折り広吉さんから「ブルーポピーを見に行きませんか」とのお誘いに即答したのは言うまでもない。一昨年(1992年)の8月10日から2週間、私に劣らず花好きの女性と3人で、贅沢な花の旅に出発したのである。福岡空港から上海まで一時間半。上海から四川省の成都まで2時間半。四川省だけで日本の1.5倍の広さだとは、やはり中国は広い。成都から日本製のランクルで、ガイドさんと運転手を加えた5人の車の旅。2日間のドライブが終わり、最終の日隆(リーロン)の村から荷運びのヤクと一緒にキャラバン開始。ベースキャンプは高度3,600mの河畔の放牧地、老牛(ラオニュウ)園子(エンツウ)。次の日は高度順応のため、上流の大きな湖、太海子(ターハイツウ)（3,800m）までハイキング。そしていよいよ太姑娘山中腹のA・C4,300mまで移動する。朝8時B・Cを出発、いろいろな花が咲き乱れる中をゆっくりのんびり登る。空はあくまで青く、空気は澄んで日差しは暖か、気が遠くなるほど悠長な世界だ。日本での気忙しい日々が嘘のような世界である。金露梅？の黄色の花の群生が終わり、サクラ草の咲く湿地帯を過ぎた、高度4,200mあたりより、ブルーポピーがあっちにもこっちにも。本当にブルーポピーなのだ。私が永年想い憧れ続けた本物のブルーポピー。そして「踏んだくるごつある」の言葉通り。ブルーポピーが初めて発見されたのは1912年だとか、それまでは、こんな高地に誰にも知られずにひっ

そりと咲き続けていたのだろうと、なお一層いとおしさが増す。ブルーポピーにも何種類かあるようで、草丈30～40cm位で花数も多くごついのもあれば、20cm足らずで花の色がブルーというより赤紫色に近く、全くトゲがないものもある。色も少しづつ違っている。花びらを手で触り、香りを嗅ぎ、蕾をいじって、これぞ私のブルーポピーと納得。這いつくばって夢中でカメラのシャッターを押す。あそこにも、ここにもと頭の中にはブルーポピー以外何もなく、思わず時間がたつのも忘れていたほど。

案内役の方が心配して引き返して来られるほど、夢中で花と遊んでいたらしい。日隆までの途中、巴郎山峠(4,500m) 付近でもブルーポピーには出会ったのだが、私の憧れていたものとは随分違っていて少々がっかりしていたところだったので、やっとこれで私の夢が叶ったと嬉しい。その上、太姑娘山5,025m にも登頂出来た。ただ残念だったのは期待していた山頂からの展望、四姑娘山へ続く姉妹連山と、遠く南方にそびえ立つミニアコンガ山がガスで隠されて見ることができなかったことである。 5,000m を越える高さを割に楽に歩けたことは、前年のモンブラン登頂失敗が経験として役にたったように思う。この中国の山旅はブルーポピーをはじめ、花の種類といい、量といい大満足の花の旅であった。日本からのツアーは7月始めから、最後の私達まで数パーティあり、また外国からも来ていたが、この自然が、この花がいつまでも荒らされず、残されることを願うばかりである。

沖縄・与那覇岳

・・登らざるの記・・

長田光義

平成5年5月14日、私と友人の二人は、午前9時、名護市をレンタカーで出発し沖縄本島の西海岸を北上した。国頭村の奥間小学校の横から奥間林道に入ると、2km走ったところで道路の左に展望所があり、ここから右手になだらかな山容をした与那覇岳と対面した。暫く走ると、舗装された大国林道に出て右折し、すぐ左へ折れて荒れた道へ入る。

道は降雨のあとで赤土がむき出しになり、車の腹を打つ。ついに車では走れなくなり、歩くことにした。ここまで展望所から3.5km だった。約10分歩くと、九合目登山口の標柱があり山道に入る。薄暗い森の中を20分ほど行くと、山道は一旦下りとなる。最高点はまだだいぶん先のようだ。残念ながらここで時間切れとなり引き返すことにした。何とも締まらない山行になったが、林道に出て車に帰りついた時は、ハブの不安から解放されてほっとした。

次には、十分な準備と時間を持って来たいと思いながら山を下った。

〔追記〕
与那覇岳は沖縄本島の最高峰で、498m とされてきましたが、最近さらに高いピークが確認されて 503m と改められました。また、ヤンバルクイナ、ノグチゲラ、アカヒゲなどの野鳥が棲息し「自然保護区域」に指定されています。

大崩山

—昨日．今日．明日—

広吉功

私にとって大崩山は、その後の山と共に過ごす人生の出発点となった山である。高校入学と同時に入部した山岳部の春の合宿は、この山群で行われた。その後3年間のクラブ活動の殆どをこの山で行った。

祝子川(ほうりがわ)は大崩山に発し日向灘にそそぐ美しい流れである。この谷の最奥部に、主に林業を営む人々が住む上祝子の集落があるが、下流域からは想像も出来ぬ程の美しい渓流の里である。地元の猟師、小野さん宅で山小屋の利用料金を支払い、上流の大崩山荘まで、重いキスリングザックに汗をしみこませながら木

馬道を歩いたものだった。約２時間の登り径であった。それも昭和42年頃までで、その後は矢継ぎ早に林道が作られ、大崩山最短コースの大野原谷などは、大規模な伐採のため見る影もない姿になってしまった。

大崩山域へのもう一つの入り口は、五ヶ瀬川の支流、綱の瀬川である。上流で鹿川を吐き合わせ、さらに鹿納谷となって分水嶺へ突き上げている。鹿川は今村集落の穏やかな広がりを経て、鉾岳、鬼の目山の谷々を分け鹿川越しの源流へと溯る。この地もまた上祝子と同様に、否それ以上に伐採が進み、かつては秘峰とされていた日隠山、釣鐘山などは山頂近くまで植林化している。上祝子の木馬道は炭焼きの用材や炭を馬に曳かせる道で、昭和30年頃からのものと聞く。一方、鹿川では丁度その頃から、大木の伐採のため軌道が敷かれたと言う。つまり森林軌道である。このような軌道跡は屋久島や、九州脊梁の内大臣の谷に認めることができる。日向八戸駅を起点とする森林軌道は、綱の瀬川の右岸沿いに鹿川へ。官行事業所跡から鹿納谷を鉄橋で渡ると、小谷に沿ってのびている。下鹿川付近までは、この軌道跡は通学道、生活道として今も使われているが、上流部は既に廃道になり消えかかっているという。

晩秋のある日、この軌道跡を踏査した一団があった。日向八戸から下鹿川までは快適な遊歩道だが、上流域は壊れた鉄橋を渡ったり崩壊が進む危険な沢を徒渉したり、藪を分けたりしながら、たっぷり一日かけて鹿川の西の内へ続いていることを確認したという。

その後さらに踏査をすすめるため、地元の人々にも意見を求めて、山里で神楽の始まる12月初旬に鹿納谷に入った。かつての軌道が鹿納谷を渡るところにあった赤い鉄橋は、そのまま残っていた。これを渡り小谷に沿って溯る。昭和34年に作られた概念図には、宇土内谷の吐き合いから、約１キロ上流の左岸へ渡った地点で軌道は終わっている。踏査班はさらに小谷の上流まで足をのばしたが、気がつくと陽は既に山の端に落ちていたという。40歳を越した中年男女のこの一団は、一個しかない懐中電灯の明かりを頼りに、互いに手を握り大声で唄いながら励ましあって闇に包まれた沢を下り、無事に鹿川の里に着いたという。鹿納谷吐き合いにあった官行事業所による伐採は、昭和40年頃から植林と並行して進められることになり、軌道に替わって林道が山奥深くまで建設された。こうして大崩山系の南西側は昔の面影を失っていったのである。西の内から峠谷という小谷沿いに微かな径があるが、それは日隠山と釣鐘山の鞍部である鹿川峠(山裏越)に延びている。この径は日の影側の小河内、下鶴へと下っているが、かつての生活道、所謂「塩の道」であった訳である。「牛馬を曳いて・・」と語られるが、往時の道は谷の上部で消滅しており、僅かに「越し」で当時を垣間見偲ぶしかない。また鹿川と上祝子を結ぶ鹿川越も同じような生活の道、そして、かつては嫁取り、婿取りの草鞋が行き交ったまじわりの道でもあったという。なお、この二つの峠は明治10年西南の役の古戦場で、薩軍撤退の哀話を秘めた道でもある。今日、幾多の歴史を秘めたこの地を拠点に多くの観光開発が進められている。観光目的のスーパー林道計画では鬼の目林道と大野原林道をつなぎ、大崩山の小積ダキ直下に展望台を作り、さらに延岡市へつなぐという。鉾岳の自然林も、雌鉾のアケボノツツジも、鬼の目山の天然杉も、大崩山坊主尾根見返りの塔のササユリも、すべての自然が過去の語り草になる日も遠くはないであろう。昭和30年代から40年代にかけて、キスリングに汗をしみこませ、トリコニーに足を滑らせながら歩き廻った大崩の山々が、次第に変容していくのは実に悲しいことである。山に岩場に青春を賭け、そのためだけに生きて来た、否、生き続けようとする或る初老の男の夢の具現、「庵・鹿川」の前を観光の車の列が行き交うのを見るのは忍びがたいことである。私の知らない大崩の「昨日」は、古老の語りと推察か

ら、「今日」は、青春の日からの感性で、また「明日」は回帰への切望をこめて、せめて今のままの大崩であることを祈りつつ記す。

ゴミのない九州の山を願う

阿南誠士

山を歩き始めて、早いもので30年が過ぎた。それだけ年齢も重ねたことである。振り返って今思うことは、山を愛する人と共に生活ができ、共に話が出来たことが私の最高の喜びである。住まいも熊本市内を離れ八方ヶ岳の麓、菊鹿町に移って八年になる。朝は小鳥の鳴き声で目を覚まし、夜は満天の星空を仰ぎ静寂のなかに寝る。大自然の懐に抱かれた明け暮れである。仕事柄(アウトドアショップ) もあるが多くの山仲間と話し、山を歩く機会も多い。

昨年の6月は一人で九州の百山を歩いた。約一ヵ月仕事を忘れ、家族を忘れ?(顧みずが正解) 一人ぼっちの山歩きであった。梅雨の候であり、当然のことながら連日、雨や風、雷鳴に震え上がりながら歩いた。しかし私にとっては自らに課した試練であり、恵みの雨風であった。歩きながら多くのことを学んだように思う。その一つにゴミのある山、ゴミのない山があったことである。名山と言われる山の頂きには殆どゴミがない。しかし手軽に登れる山手近かにある山などはゴミがいっぱいであった。私はせめて、何時も歩かせて頂いている九州の山が、「ゴミの一つもない山」であることを願い「ゴミを拾って下山しよう」を実行しようと思う。これは私が主宰する自然を愛する会の今年度の実行スローガンでもある。勿論、自分が捨てなければそれでよし！と考えること、これも大切であるが私もこれまで私が育ってきた中で、どれだけ多くのゴミを捨ててきたことであろう。そのゴミを拾わせて頂くつもりで、恥ずかしさに勇気を出している昨今の山歩きである。

北岳に思う

池崎浩一

◎私と北岳

昨年の夏、電友アルコウ会(NTTのOB組織)の富士登山に参加した。その時、本田さん(支部長)と「ついでに北岳にも登ろう」ということになり、腰痛症の前科を持つ私にとっては些か過ぎた計画と思ったが、北岳への思い絶ちがたく、欲を出して本邦一、二位の山を連続して登ることになった。実は以前から北岳には登りたいと思っていた。富士山に次ぐ高さにも魅力があったし、山の歌で聞いたあのバットレスも見たかった。そして神秘な森と谷と言われる南アの山の深さを味わって見たいと思っていた。古い話で恐縮だが静岡国体の頃(昭和32年)、南アに夢中になったことがあった。

その頃北岳に登るには、鳳凰山の峠を越えるか、甲斐駒側の北沢峠からアプローチするか、いずれにしても2,000m 近い峠を越えねばならなかった。そのため日数は嵩み、かつ重装備の山行となり敬遠せざるを得なかった。ところが、野呂川林道が開かれた今は、登山口の広河原まで甲府駅からバスで2時間である。便利になったお蔭でサブザック一つで登れるようになったのは有難いが、北ア並みに大衆化していくのかと思うと、時の流れとはいえ複雑な気持ちであった。

◎北岳に登る

7月21日朝、河口湖畔のホテルで富士登山を済ませた一行と別れ、甲府経由で夜叉神峠を越えて広河原に向かう。午後2時には広河原ロッジに着く。この日は大樺沢出合い付近を散策しただけで、ゆっくり休養する。

翌22日は8時出発となる。天気もよさそうなので、予定通り大樺沢直上コースをとる。

崩壊が激しいガラ場を通り、雪渓の左岸をつめて二俣分岐に着く。この辺りは曾てバッ

トレスを目指したクライマー達の、幕営地だったところで、可憐なキンポウゲの花が今を盛りと咲いていた。ここから、やや本格的な雪渓の登りとなる。今日も十指に余るパーティが散見される。ストック代わりに木切れを拾い蹴こみをつけながら登る。頬を撫でる涼風が心地よい。幸いクレバスもなく苦しいが快適な登行が続く。振り返ると雲を被った鳳凰三山が指呼の間に見える。高度を上げるにつれて、それが低くなってゆくのが嬉しい。バットレスにも雲がかかり、全容は見られなかったが、急峻なガリーの上部に突き立った岩稜を垣間見て、ダイナミックな片鱗がうかがわれた。雪渓が尽きたところで、吊り尾根からの支稜に取りつく。一息いれたあとダケカンバの急坂をよじ登る。所々に梯子が取り付けられ、ザイル無しには登れそうにない岩場も難なく通過し30分足らずで八本歯のコルに着く。吊り尾根をつめて白峰三山の縦走路に出たら山頂は近い。15時20分、北岳3,192.4mの三角点についた。雲に包まれ期待した展望は得られなかったが、年のせいか本田さんと握手しながら、熱い感動を押さえ切れなかった。滞頂20分で山頂を去る。岩礫の急坂を下り16時30分、肩の小屋に着く。その夜は満員の盛況であった。翌23日は未明に起きてご来光を仰ぐ。中部山岳の雄大な黎明の眺望は素晴らしい。5時30分には小屋をたつ。30分で白根御池の分岐、これから約500mの急斜面の下りは、広大な「草滑り」のお花畑、しばしば足を止めて繚乱の美を楽しむ。白根御池小屋に着いたころから雨になる。暫く雨宿りをしたが結局本降りになって小屋を後にする。倒木を跨いだり潜ったり、崩落した山道を高巻きしたりしながら、原生林の中の細い道を下る。9時30分、広河原ロッジに着く。

◎北岳に思う

北岳はいい山だ。本邦2位の高さも気に入ったが、深い森と谷、可憐なお花畑、そして豪壮な岩と雪はアルペン気分を充分満喫させてくれた。バットレスを仰ぎながらの雪渓登高も、ちょっぴり緊張感があって楽しかった。

今度は鳳凰三山を縦走しながら、北岳を眺めて見たいなどと思ったものである。

春の八ヶ岳山行記

出来田　耕　介

永年の念願だった八ヶ岳山行にお誘いがかかり、早速参加する。

■ 5月1日　熊本～東京～甲府(泊)

夕刻、飛行機で熊本を発ち、汽車に乗り継いで甲府泊まり。

■ 5月2日　甲府～茅野～美濃戸口～赤岳鉱泉(泊)

早朝、茅野からタクシーで美濃戸口へ。ここから歩き始めた。林道を約1時間で美濃戸山荘に着く。朝食を一杯のソバで済ませ元気一新して、中高年の一行4人は赤岳鉱泉目指して歩き出した。未舗装の林道は、この数日の雨のためぬかって歩き難い。登山道に入り沢を渡る頃、ガスの切れ間に大同心らしい岩峰が見えた。いよいよ念願の山に来たという実感が湧いて来て嬉しい。赤岳鉱泉は深い雪の中、煙突の白煙が頼もしい。予約の強みか八畳一間を割り当てられ、早速持参の焼酎で前祝いの一杯となる。

■ 5月3日　赤岳鉱泉～赤岩ノ頭～硫黄岳～夏沢峠～箕冠山～根石山荘(泊)

朝、小雪が舞いガスに閉ざされた暗い天候だ。林間の雪の急傾斜を、一歩一歩踏み締めながら慎重に登る。途中、ガスの切れ間に写真で見覚えがある赤岳や阿弥陀岳が、見え隠れする。40年前、まだ中学生(旧制)の頃、田淵行雄氏の「山岳写真傑作集」という本で八ヶ岳の山々を知り、いつか行ってみたいと心に暖めていた山が、今目前にあることに深い感慨を覚える。更に傾斜を増した雪面を、キックステップで登り切ると赤岩ノ頭(2,656m)だった。ガスも晴れ、一気に展望が開けるが風が強い。一服の後、硫黄岳へ向かって岩稜を登る。硫黄岳(2,742m)の山頂は石ころだらけの

広い所で、あちこちに大きなケルンが積み上げてある。夏沢峠へ下りかけると、ザックリと削り落としたような北東壁の大岩壁の上で足が竦むようだ。間もなく右下の森の中に、本沢温泉の屋根が見える。夏沢峠は、道の両側に板壁の小さな山小屋が2軒たっている佗しい感じのする所だった。林間の坂道を少し登ると箕冠山(2,590m)で、その先に今夜の泊まり場の根石山荘が見える。屋根の上に風よけのための石をずらりと並べた、頼りなさそうな平屋の小屋だ。中に入ると、床には水が溜り薄暗いが、薪ストーブが燃えていた。平屋と思ったが2階があり、半分は広い蚕棚で40人位は泊まれるようになっている。大部屋の中央にある煉炭コタツが有難い。寒いので首まですっぽり入ったら、うとうとした。この夜の泊まり客は10人だった。

■ 5月4日 根石山荘～天狗岳～黒百合ヒュッテ～中山～高見石小屋～渋湯(泊)

無風、快晴、最高の天気だった。心も軽く出発、東天狗岳に向かう。山頂に着くとそのすぐ西側に、こことは対称的に真っ白な雪を被った西天狗岳(2,646m)が見える。一面の雪の中に幅広いトレースが続いている。少し急な坂を一寸登ると頂上で、360度の展望が開ける。東から西へ、浅間山、北アルプス連峰、次いで南アルプスの山々が、すぐ近くには蓼科山が見える。一面の雪と強い日差しの中、日焼け防止の自作のお面をすっぽり被る。数年前、剣岳の長次郎雪渓を下った時、顔の皮膚がドロドロに溶けたように焼れ爛れたのを思い出し、手拭いに目と口の穴を明けて作った物だ。このときの記念写真は今見ても面白い。まるでプロレスのデストロイヤーだ。溶岩台地のスリバチ池の側を通り、グリセードの真似ごとをして少し下ると、黒百合ヒュッテに着いた。前庭のテーブルとイスは、深い雪に掘られた塹壕のような穴の中だ。先ずはビールで乾杯し、昼飯は熱いカレーライスを注文する。ここを発ち、針葉樹の中のトレースを辿る。一寸踏み外すと膝上までスポッと入る位の積雪だ。中山(2,496m)は岩だらけの広い台地だった。この後も同じような平担な道を歩いて、高見石小屋に着いた。裏の岩山(2,280m)に登り缶ビールで乾杯する。すぐ下の林の中に白駒池と、そのほとりにたつ白駒荘が見える。いよいよこの山旅の最終コースだ。賽の河原は岩伝いに飛んだり、岩の間をすり抜けたりと苦行の2時間で、今宵の宿の渋の湯に着いた時にはほっとした。天候にも恵まれ、念願の山に登れて幸せ一杯の山行であった。

遠くなる山

深堀弘泰

昨年11月のはじめに私が住む団地の人々十数人と、熊本市近郊の金峰山に登った。

平均年齢65才にもなるこの人たちは、今まで殆ど山らしい山に登ったことはないという。標高665mのこの山が、山らしい山といえるかどうかは暫く措くとしても、どうして山に登る気になったのかは説明がいる。実は山登りは二の次だったのだ。山麓にある峠の茶屋の「だご汁」が美味いという話をしたところ、是非そのだご汁を食べたいということになった。それには車で行くより歩いて行こう、そして歩くのだったら金峰山に登ろうと話が発展していった。言いだしっぺの私がリーダーということになり、早朝に団地を出発した。皆、手製の杖を持っている。ミカン山を過ぎてから、柔らかな土の感触に昔を思い出しながら、たっぷり時間をかけて歩いた。

昼前に山頂に着いた。下山は通称「猿滑り」の急坂を下った。　途中で山登りをリタイアした3人が峠の茶屋で待ち受けていた。だご汁は期待通りにおいしかった。みな満腹して機嫌よく帰途についた。ここまでは一般の山の同好会の姿と変わることはない。私が考えさせられたのはそれからである。彼らは道すがら、何度も何度も振り返っては山を見るの

である。山の見えるところでは飽くことなく、それは異常とも思えるほどの執着ぶりであった。「あの山に登った」という感慨が何時までも去来するのであろう。山の存在感がどっしりとこの人々の胸に居座ったに違いない。

あのマロリーの Because it is there の言葉を想い起こさせるほどに、山が与える想いは様々だが、　それはあくまでも受ける人の心の在り方なのだ。私もザックを担いで半世紀になる。しかし、腰痛で高い山へ挑戦できなくなってから、このような新鮮な感動に浸ることがなくなってしまっている。「最近は金峰山ばかりです」と、恥じを晒すようにして言っていた自分が恥ずかしい。もう一つは彼らにとってこの山が最後の登山になるかも知れないという思いがあることである。60才を過ぎると「お幾つですか」と、人に尋ねられることが多い。夫々が自分の年齢を数えている。あと何年生きることができるか、その間にどういうことができるか、どういう生き方をしてゆくかを考える。否応なしに死というものに直面し死の準備をしなければならない。その心の在り方が、もう登れないかも知れない山に振り返り振り返る動作に表現されているとも言える。私もそういう年代になってしまった。もう若い頃“山が好きだから”というそれだけの理由で登っていたときのようにはいかない。やがて、ふと顔をあげてみると、どんな低い山でも大きな障壁となって立ちはだかっているかも知れないのだ。金峰山は今はまだ私に微笑みかけている。いつでもいらっしゃいと呼びかけてくれる。しかし今日のこの団地の人々が対したように、構えて登らなければならない山になるのかも知れない。

〝おくて〟の山歩き

後　藤　之　俊

平成３年末に帰郷。河上洋子さん、奥野支部長(当時)のご紹介で入会したのが平成４年２月。会員番号は11119番です。

菊池市の出身ですが、在郷時は九州の山で登ったのは近くの鞍岳だけ。上京後も20歳過ぎまで山歴は殆ど無し。社会人になってから漸く山歩きに興味を持ちはじめ、丹沢山、八ヶ岳縦走、奥秩父の甲武信ヶ岳、後立山縦走など少しづつ足をのばしていきました。

しかし、それも20代で終わり、中年期は御多分に漏れず仕事にかまけて、山とは縁遠い存在に成り下がったのでした。

それでも山への関心が失せていたわけではありません。出張先で山が見えると寸暇を惜しんで、短靴、背広姿での無謀登山(立山、木曽駒など）もいくたびか。仕事離れができたのは人生の折り返し点をとっくに過ぎてからでした。幸い住んでいたのがＪＲ中央線沿線の小金井でしたので、奥多摩の山は日帰りでも行けます。雲取山、大菩薩嶺などトレーニングも兼ねて何度となく歩いたものです。

それと並行して泊まりがけの山行も増えました。八ヶ岳、奥秩父(金峰～国師)、南アルプス（鳳凰三山、甲斐駒、仙丈、白峰三山、塩見岳)、北アルプス（槍～穂高、穂高岳周辺）等々。また東北の山（早池峰山系、飯豊連峰）へも出掛けました。まあ私の山歴といったら大部分がこの10年間位に集中しています。帰郷してからの山歩きはまだいくらもしていません。九州でも屋久島や大崩山はまだですし、県内でさえ九州脊梁山地へは車が無いため殆ど行ったことが無いありさまです。ともあれ、これまで積雪期の高山や、沢登り、岩登りなど恐ろしくて避けてきましたが、いい年をして余力が残らないような登山をしたこともありました。今後はそんな身の程知らずのトライはやめて、老年登山者として心身ともにゆとりのある登山を心がけたいと考えています。

山の心・カナディアンロッキーの旅

（新入会員の自己紹介）

丸　尾　龍　一

私は今まで、本会員の田上さんから個人的にご指導を受けて登山を続けて来ました。

九州の山をはじめ、積雪期の立山連峰や冬の北海道の大雪山(旭岳)にも同行しました。

支部の会友となってからは、支部の諸行事や例会登山に参加させていただきました。一昨年の熊本支部設立35周年記念カナディアンロッキー遠征隊には、その一員として参加しました。私にとっては初めての海外登山でしたが、経験豊富な工藤隊長や広吉副隊長のリードで、広大なカナダの大自然を満喫することができました。僅か10日間の山旅でしたがレンタカーでのドライブ、自炊しながらのログハウス生活は、何十年来の友人のように打ち解けたものでした。アサバスカ峰の登山では、残念ながら登頂は出来ませんでしたが、アンザイレンして大きく口をあけたクレバスを飛び越え、或いは迂回したり、雪崩や滑落の危険がある氷壁下のトラバースなど、鮮烈な体験を通じて一層信頼感が増して来ました。また下で待つ留守隊の方々には、たいへん心配をかけ、途中まで出迎えいただくなどご好意には感激しました。帰国後もこのことは強い印象として残り、こんな素晴らしい皆さんと、今後とも登山活動を続けたいと思い、田上さんと本田支部長に入会をお願いしたのです。そして昨年７月、入会が承認されました。会員番号は11538番です。歴史と伝統のある日本山岳会に入会できてこんな嬉しいことはありません。その名を汚さないよう頑張りますのでよろしくお願いします。

会　務　報　告

◇ 支部委員会

日　時　平成５年４月11日(日)18時

場　所　熊本市内坪井 ホルン山小屋

内　容　支部総会の議案検討

出席者　本田・和仁古・田上・工藤・河上・中村(恵)・広吉・樋口　（８名）

◇平成５年度支部総会

日　時　４月25日(日)18時

場　所　熊本市内坪井 ホルン山小屋

内　容　田上常務委員の司会により、本田支部長が議長となって会議を進めたが主な事項は次の通り。

＊平成４年度事業及び収支決算、監査報告
- 収　入…541,030円
- 支　出…175,358円
- 繰　越…365,672円

＊平成５年度事業計画、予算、役員改選
- ８月　夏季例会(ビールパーティ)
- 10月　秋季例会(阿蘇高岳)　今年度、熊本支部が担当する九州４支部合同会議と併せて実施する。
- １月　新年晩餐会
- ３月　春季例会(大崩山系・五葉岳)

＊委員(再任)　工藤文昭　中村恵二　河上洋子　広吉　功

監事(再任)　樋口　格

常務委員(重任)　田上敏行

出席者　奥野・西沢・馬場(猛)・宮崎(豊)・本田・田上・和仁古・工藤・鶴田・樋口・広永・馬場(博)・藤本・池崎・出来田・後藤(21名)

◇平成５年度通常総会

日　時　５月15日(土)14時

場　所　東京都千代田区内神田1-1-12　コープビル

内　容　10:30～12:30　支部長会議
14:00～16:00　通常総会
16:15～18:00　懇 親 会

出席者　本田支部長

◇支部委員会

日　時　６月６日(日)18時

場　所　熊本市内坪井 ホルン山小屋

内　容　事業計画の実施について
・本部総会の報告

・秋季例会は九州４支部合同会議と併せて実施する。

・例会企画の分担　秋季(工藤)春季(広吉)

出席者　本田・田上・中村(恵)・河上　　(４名)

◇熊本アルコウ会創立60周年祝賀会

日　時　７月18日(日)15時

場　所　熊本交通センターホテル

内　容　熊本支部には熊本アルコウ会の会員が多い。第２代三谷支部長、第３代西沢支部長はじめ現在在籍している会員でも宮崎、和仁古、菊池、門脇、鶴田、吉田の各氏がいる。

熊本県内で最大の会員を擁して活動を続けている同会の益々の発展をお祝いした。

出席者　　本田支部長

◇夏季例会(ビールパーティ)

日　時　８月22日(日)18時

場　所　熊本市内坪井 ホルン山小屋

内　容　冷夏、多雨のため今シーズンの山行も湿りがち、そのせいか例年より少なめの18名が出席。先ず本田支部長の挨拶、次いで新入会の丸尾龍一氏の紹介があり、久しぶりに出席した松本会員の音頭によるジョッキでの乾杯。アルコールが行き渡ったところで出席者の近況報告あり。

(奥野) 82才になり犬との散歩が唯一の運動になった。

(宮崎) 入院して足腰が弱った。

(田上) 子供を背負って立山に登った。

(河上) なかなか山に行けない、当分は夜の会長で頑張りたい。

(広永) 足が大分よくなった。ぼつぼつ歩いている。

(神谷) 霧島で猪に遭遇した。

(池崎) 春は阿蘇外輪を一周した、夏は富士山、　北岳に登った。

恒例のビデオ放映は、神谷会員の「77才はまだ青春なり…脇坂順一先生」など。20時半過ぎ、歓談は尽きないが奥野会員の音頭で万歳三唱して散会した。

出席者　奥野・馬場(猛)・宮崎(豊)・本田・田上・松本・菊池・河上・鶴田・樋口・広永・神谷(平)・神谷(文)・池崎・後藤・出来田・丸尾・前田　　(18名)

◇九州四支部合同会議
秋季例会(阿蘇高岳)

日　時　９月25日(土)～26日(日)

場　所　阿蘇郡一宮町「民宿・阿蘇の四季」
仙酔尾根から高岳(1,592m)登山

内　容　18:00～19:00 九州４支部合同会議
(40名出席)

田上常任委員の司会で開会。本田支部長挨拶の後、各支部近況報告あり議事に入る。福岡支部の吉村支部長から屋久島での全国集会、鹿児島支部設立、合同海外登山など問題提起があり意見交換が行われた。今後の合同会議の運営については各支部の回り持ちとするが、夫々の例会山行に組み入れる形で行った方がよいとの意見あり、各支部の特色をだしてやりやすい形をとることで一致したが、来年は支部設立10周年を迎える宮崎 支部に担当をお願いすることになった。

19:20～21:00 懇親会

西沢支部顧問の歓迎挨拶の後、吉村福岡支部長の乾杯で開宴。出席者全員が次々に自己紹介を行い親睦を深めた。歓談の時間が足らず、別室での二次会は夜半まで続き大いに盛り上がった。

翌日(26日) 仙酔尾根から高岳登山
8:00～13:00

所用で山に登らない３名と別れて、37名がマイカーを連ねて仙酔峡へ。ここで登山だけ参加の５名を加え、先ず登山隊長の工藤委員から阿蘇山の概要について説明あり、仙酔峡で待つ３名を残して42名が仙酔尾根

(通称バカ尾根)を登る。10時過ぎ高岳山頂の一角、三つ石に到着したところで、昨年チベットからチョーオユーに登頂した馬場博行会員がパラグライダーでフライトを試みる。風が強く何度か試みてギャラリーをはらはらさせたが、やや風が収まったところで見事に成功して拍手が湧いた。10分程で無事に小堀牧の上部に着地した。11時山頂三角点に着いて万歳三唱、記念写真と昼飯を済ませて中岳経由で下山する。13時、仙酔峡に下りつき次回の宮崎での再会を約して解散した。

参加者　熊本支部…西沢・馬場(猛)夫妻・宮崎・石井・本田・田上・和仁古・工藤・松本夫妻・菊池夫妻・河上・藤木・鶴田・樋口夫妻・馬場(博)・広永・神谷夫妻・池崎・後藤・丸尾　福岡支部…吉村・太田・一山・継松・上岡・蔵富・日向・稲田・篠田　東九州支部…西・加藤・甲斐・鹿島・田尻　宮崎支部…大谷夫妻・田村夫妻・高岩・服部・松山

◇傘寿・脇坂順一先生を囲む会

日　時　10月14日(木)18時

場　所　熊本市内坪井 ホルン山小屋

内　容　この夏80才でモンブランに登り、海外の山150峰登頂を達成された脇坂先生の偉業を讃え、併せて傘寿をお祝いした。

脇坂先生からモンブラン登山の報告とスライド上映あり

出席者　西沢・宮崎・本田・田上・工藤・河上・鶴田・広永・神谷夫妻・藤本・池崎・出来田丸尾（会員外）本田・藤木・中尾（18名）

◇平成5年度全国支部大会(山梨)

「錦秋の奥秩父」木暮理太郎を偲んで

日　時　10月23日(土)～24日(日)

場　所　(前夜祭・宿泊)
山梨県北巨摩郡須玉町 増富温泉郷
(登山) 瑞牆山 2,230m

内　容　全国から170名が参集して行われたが、地元の協力を得てローカルカラー豊かな大会となり、お天気にも恵まれて成功した。山梨支部の皆さんのご苦労に感謝する。日本百名山に選ばれている瑞牆山は流石にいい山だったが、ここまで来て一つでは勿体ないと翌日は金峰山にも登った。

参加者　本田支部長・門脇・鶴田　（3名）

◇今西錦司先生を偲ぶ会(岐阜支部)

日　時　10月30日(土)～31日(日)

場　所　(懇親会) 大垣市万石町
大垣フォーラムホテル
(登山)　高賀山 1,224m

内　容　今西錦司先生1500山登頂に関わりを持つ人々は、当然のことながら全国に数多い。没後も一層敬慕の念を深めている所謂、今西党の人々 100名が高木岐阜支部長の呼びかけに応じて大垣市に参集した。

今西先生のお人柄を反映してか、追悼会という湿っぽさはなく、遺影を囲んで大いに飲み、語り、歌った。翌日は、1960年に今西先生も登られた一等三角点の山、高賀山に藤平会長らと共に登った。

参加者　本田支部長

◇第9回宮崎ウエストン祭

日　時　11月3日(水)9時

場　所　宮崎県西臼杵郡高千穂町
五ヵ所高原三秀台

内　容　今回は、特に青森県三戸郡新郷村に自費でウエストン顕彰碑を建立した吉田　弥氏(会員)も出席された。

出席者　奥野・西沢・本田・田上・丸尾　（5名）

◇平成5年度年次晩餐会

日　時　東京都　新高輪プリンスホテル

内　容　13:00～15:00　支部長会議
18:00～21:00　晩餐会

出席者　西沢・本田　(650名)

◇新年晩餐会

日　時　平成6年1月8日(土) 18時30分

場　所　熊本市内坪井 ホルン山小屋

内　容　本田支部長より新年の挨拶あり、続いて本部年次晩餐会及び支部長会議の報告、また中高年登山者の冬山事故多発について会員の注意を喚起し新年度の支部行事への参加の要請があった。樋口夫人の音頭による乾杯で開宴、アルコールがゆきわたったところで恒例の近況スピーチあり。時間を超過して歓談は尽きないが、久しぶりに出席した深堀会員の音頭で万歳三唱して散会した。

出席者　奥野・西沢・馬場(猛)・宮崎(豊)・石井・本田・田上・工藤・門脇・中村(恵)・川端・河上・樋口夫妻・馬場(博)・広永・深堀・後藤・丸尾・前田　(20名)

会員消息

◎新入会員

丸尾　龍一（11538）
〒861-41 熊本市薄場町634-1
電話　(096)357-1441

◎支部役員

支部顧問	奥野　正亥	西沢　健一
支部長	本田　誠也	
副支部長	和仁古　昇	
常任委員	田上　敏行	
委員	工藤　文昭	中村　恵二
	河上　洋子	広吉　功
会計監事	樋口　格	

◎台湾縦断少年少女自転車の旅

自然を愛する会と、やまびこ山村塾を主宰する阿南誠志さんは、会員の小中学生29人を引率して昨年(1993年)12月28日から新年1月8日までの12日間、台湾の高雄から台北までの約420kmを自転車で走破した。阿南さんは前年1992年8月にも、小中学生49名を引き連れて「参勤交代の旅」東京～熊本780km の自転車旅行を実行している。いずれも快挙として新聞等で大きく取り上げられた。

◎阿蘇外輪山一周

阿蘇火山の巨大カルデラ、外輪山128km の一周は、1964年5月に6日間をかけて熊本日日新聞社の外輪一周学術調査班により実施された。昨年2月から5月にかけて、29年ぶりにその当時の山岳班のメンバー3名（池崎浩一、本田誠也、藤本多加志）がコースを11回に分けて歩いた。北外輪はやまなみハイウェーやミルクロードなど道路が整備されていて殆ど高原逍遥。南外輪も自然歩道がつけられて随分楽に歩けるようになった。難物は高千穂野周辺、駒返峠から大矢野岳、本谷越付近と北向山の下部位であった。パーティの平均年齢65才で総歩行距離160km は些か堪えた。

後　記

支部報第5号をお届けします。現在支部会員は39名、会友6名で計45名です。九州で一番古い支部ですが、依然として一番小さな支部でもあります。しかし所帯が小さいために纏まりは宜しいようで、昨年度も年間の行事参加率は60%に近く可なりよいと言えます。支部会員の皆さんのご協力に改めて感謝します。このところ山岳会本部の会合でいつも話題にのぼることですが、会員の高齢化が著しいと言うことです。毎年の入会者にも若い人が少ない。熊本支部も会員の平均年齢は58才です。かく言う私も66才、平均年齢を遥かに超えています。こんなことで山岳会の将来はと、嘆いて見ても始まらない。但し、いま元気に山登りをしている中高年の人達には年齢の意識が少ないようです。夫々手のとどく目標を立ててバリバリ登っているようです。それでよしとすべきでしょうか。ただ少し気になるのは、最近中高年登山者の事故が増えていることです。急ぐことはないから、今までの長い年月の豊富な経験を生かして、安全で楽しい登山を心掛けよう。これは私自身の自戒の弁でもあります。

（本田・記）

※本文中のカットは藤本多加志会員です。